

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

高等教育における「ミュージアム体験」の可能性：
共同研究【若手】：
高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉屋, 淳子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008491

共同研究【若手】● 高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究（2015-2017 年度）

共同研究の進行状況

本共同研究は、高等教育のなかに博物館資料をどう位置づけ、それをどのように活用していくかという問題意識から出発し、2015年10月から2017年3月までの間に、4回の研究会を開催してきた。

初年度は、「博物館資料とその活用法」をテーマに、「高等教育機関における博物館資料の活用—みんぱっくの活用例」（呉屋淳子）と「フィールドワーク演習の講義における博物館資料の活用—みんぱっくの使用法を学ぶ」（稲澤努、尚絅学院大学）について報告を行った。そこでは、モノ資料の観察・思考の循環を考えることを議論の中心に据え、事例として国立民族学博物館が運用する文化学習キット「みんぱっく」の活用方法を紹介した。

2年目は「ミュージアムが内包する高等教育の可能性」をテーマに研究会を3回開催し、「民族教育の〈場〉としての博物館—中国、オーストラリアにおける華人系資料の活用」（河合洋尚、国立民族学博物館）、「大学教育における博物館資源の活用—みんぱっくを事例として」（稲澤）、「メソコスムとしてのミュージアム体験」（石倉敏明、秋田公立美術大学）、「教科『情報』におけるみんぱっくを使った情報収集能力育成に関する実践」（時任隼平、関西学院大学）、「博物館に『参加』する—博物館作業の経験から得る学びの一事例」（如法寺慶大、南山大学人類学博物館）について報告を行った。

上記5つの発表内容を簡単に紹介する。河合は、近代制度としての大学と公共空間としてのミュージアムの相互作用のあり方に着目しながら、公共空間としてのミュージアムからいかに人類学的な多文化教育プログラムを提案していくかという課題について発表した。稲澤は、これまでおもに義務教育を対象としていた博物館資料の利用（具体的には「みんぱっく」）を、高等教育のカリキュラムのなかにどう位置づけ、実践に繋げていくかについて報告を行った。時任は、高等学校における「情報」の授業で、インターネットを用いた従来の知識先行の学習に対し、博物館資料を用いた観察（インターネットで検索するという行為を行わずに、用意したモノ資料を実際に手に取りながらみたり、モノ資料について話し合ったりしながら情報を収集していく方法）について検討し、学習者側の情報収集の過程に関する報告をした。石倉は、ミュージアムが「世界を分類する場所」から「世界の価値をみい出す場所」へと転換する可能性を、美術大学の取り組みから示し、「価値創造空間」として

のミュージアムについて報告を行った。如法寺は、博物館教育を受けた側、つまり「教育された側」の視点に立ち、博物館で体得した学びについての報告を行った。

このように2年目の研究会では、博物館資料の活用法だけでなく、ミュージアムという空間をどのように捉えるのかについて積極的な議論が行われた。その発表を振り返って気づいたことは、そもそも「ミュージアムとは何か」といった根本的な問いだった。これは、研究会立ち上げ当初には想定していなかった問いではあるが、むしろ、こうした問いが本共同研究を豊かにさせてくれるのではないだろうかと考えている。最終年度では、博物館資料の活用という実践の側面ばかりに囚われることなく、ミュージアムが内包する高等教育の可能性について議論を深めていきたい。たとえば、ミュージアムという場を「価値創造空間」として捉えた場合、ミュージアムと高等教育機関が連携することによってどのような価値創造空間が生成されるのか、そして、そこではどのような教育プログラムを提供することができるのかを考えてみたい。

絵本『キュッパのはくぶつかん』から「ミュージアム体験」を考える

『キュッパのはくぶつかん』（福音館書店）という絵本がある。この絵本は、ノルウェーの作家であるオーシル・カンスタ・ヨンセンによって書かれた「キュッパ」という丸太の少年がつくる「はくぶつかん」の物語である。現在、博物館の発祥の地であるヨーロッパの文化圏を超えて、世界14カ国で翻訳されている。また、この絵本がベースとなった展覧会「キュッパのびじゅつかん」が東京都美術館で2015年7月に開催された。

この絵本は、昨年度の共同研究会で石倉が紹介した。子ども向けの絵本ではあるが、その内容には、「ミュージアム体験」という点において高等教育との親和性がみとれるという。ここでいう「ミュージアム体験」とは、たんに資料の「収集」や「保存」、「展示」を体験するという意味ではなく、収集した資料を保存したり展示したりするために必要なキュレーションや外部とのコミュニケーション、図録の作成といった作業を体験することである。石倉は、博物館資料の活用のベースには「ミュージアム体験」というものがあり、それが何かについて高等教育のレベルでも理解する必要があると主張している。とくに、博物館業務に関わる基本的な流れを把握するためには、たんにモノ（ミュージアムの資料）の



「キュッパのはくぶつかん」表紙。



大学のフィールドワーク実習の様子。学生達は500年以上続く五城目町の朝市（左写真）や、消滅した集落跡地（右写真）を見学する（2015年10月1・2日、秋田県南秋田群五城目町、石倉敏明撮影）。



秋田県立博物館におけるミュージアム体験授業（2016年4月13日、石倉敏明撮影）。

情報だけでなく、ミュージアムそのものの運営がどのように行われているのかということも把握しておく必要があるという。ここで少し絵本の内容を紹介してみたい。

主人公である丸太少年のキュッパが、森のなかでたくさんのモノを拾い、モノの名前を調べては分類し、ラベリングを行っているところから物語がはじまる。キュッパは、森で葉っぱや石ころなどを収集してきたが、街にすむおばあちゃんにモノをどのように収納したら良いかについて相談する。その結果、キュッパは「はくぶつかん」をつくり、これまで収集した資料を展示することにした。

この物語のなかにはいくつか重要なシーンが登場する。たとえば、キュッパが森のなかで拾ったモノを収集し、分類し、展示を行うまでのプロセスが描かれているだけでなく、積極的に広報活動を行うことが重要とされている。このことは「ミュージアムとは何か」といった問いを考える場合、外部（あるいは他者）とのコミュニケーションという要素がいかに大切なのかを示している。また、モノを展示して終わるのではなく、「はくぶつかん」に人が来た時には、解説するという学芸員的な仕事ははじまる。その際のキュッパの話し方には、博物館学や人類学といった専門的な語り口は一切みられない。そして、キュッパの「はくぶつかん」は、オープンして2週間後に閉館してしまう。そこでは、実際の博物館の場合ではなかなか語られないことだが、博物館が閉館する時、収集した多くのモノ資料をどのように返還したらいいのかなどについても描かれている。モノ資料を返還する前に、キュッパは全てのモノ資料を記録し、図録を作成した。この作業は、記録を残すためだけでなく、展覧会に足を運べなかった人にも展示をみてもらえるようにと行われたものである。

高等教育における「ミュージアム体験」の可能性

こうしてみると『キュッパのはくぶつかん』は、子ども向けの絵本として刊行されている一方で、そこに描かれている「ミュージアム体験」は高等教育における学びと共通している側面があることに気づく。たとえば、近年、多くの大学が、時代や社会に順応する人材を育成するのではなく、多彩な人々たちとの交流を通して進取の気性に溢れた創造力豊かな人材を育成することをカリキュラム・ポリシーとしている。とくに、現代社会における問題を自分自身で発見し、それを探求していく能力を養うことが大学の使命とされ、同時に地域社会と連携しながら教育活動を行うことが重視されている。このことは、フィールドワークの手法を用いた講義が推奨されている状況からもみてとれるだろう。

いずれにせよ、学生たちは、大学の講義のなかで、地域社会にある課題を自ら発見し、それを探求することをフィール

ドワークという手法を通して学んでいる。そしてそこでは、地域の人々といかにコミュニケーションをとるかが課題である。その場合、対話のみを重視してしまいがちだが、じつは「よくみること＝観察」も必須である。なぜなら、「よくみること」は、未知のものに出会うきわめて重要なルートであり、モノ資料を「よくみること」は単なる視覚的な活動ではなく、思考そのものだからである。さらに、そこに他者との言葉によるやりとりが介在することにより、みることはより思考に密接に関わることになる（横山 2016: 89）。そのような意味で、『キュッパのはくぶつかん』における「ミュージアム体験」は、未知なる文化へのアクセス方法として共有されるだけでなく、高等教育機関で求められる学びを豊かにする上でも有効であるといえないだろうか。もちろん、博物館資料をどう活用するかということも重要であるが、その一連の作業となるベースに何があるのかについて高等教育の関係者も交えてもっと積極的に議論する必要がある。

最後に、本共同研究は、教育を学校教育と同一視せずに、教授過程という観点から広く捉え、国内外のミュージアムの機能や役割を把握し、人類学の視点を導入しながら議論を深めていくことを目的としている。そのためには、大学教員主体の教育能力の向上、学生主体の学習の開発に関するファカルティ・ディベロプメントの再検討も同時に進める必要がある。今後も、高等教育における「ミュージアム体験」の可能性について議論を深めながら、ミュージアムと高等教育機関が連携した新たな価値創造空間の生成について研究を進めていく予定である。

【参考文献】

- 横山佐紀 2016 「コメント：美術館からみる『みんぱっく』で教室と世界をつなごう！」 上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編 『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』（国立民族学博物館調査報告 138）pp. 89-90 大阪：国立民族学博物館。
ヨンセン、オーシル・カンスタ著 2012 『キュッパのはくぶつかん』 ひだにれいこ訳 東京：福音館書店。

ごやじゅんこ

沖縄県立芸術大学音楽学部准教授。専門は、教育人類学、比較教育学。民俗芸能を創造する「場」としての学校に着目しながら、朝鮮半島、南西諸島、近年は東北地方の学校で調査研究に従事している。著書に『「学校芸能」の民族誌—創造される八重山芸能』（森話社 2017年）、論文に「박물관자료를 활용한 교육활동」 일본국립민족학박물관사재를 중심으로」 국립민속박물관연구원 『어린이와 박물관연구』（「博物館資料を活用した教育活動—日本国立民族学博物館の事例を中心に」 韓国国立民俗博物館編『子どもと博物館研究』）2014年。